

島々の歴史と現在

小笠原島

欧米各国が牽制する中、日本領土とすることに成功

1675（延宝3）年、江戸幕府は、漂流者の報告に基づき小笠原島の調査を実施しました。この調査が他国に対して先行したことが、その後の小笠原島の領有につながります。1876（明治9）年、明治政府は日本による統治を各国に通知し、国際的に日本領土として、認められます。

※「小笠原島」は現在の小笠原諸島全体ではなく、父島列島および母島列島を中心とする狭い範囲を指します。小笠原島という名前は、16世紀に小笠原貞頼が発見した（史実かは疑問視されている）ことに由来するといわれています。



父島 提供:小笠原村観光局



母島 提供:小笠原村観光局

東京から1000キロ南に父島。
さらに約50km南に母島が位置する。

	父島	母島
面積	24km ²	21km ²
人口	2,120人	452人
世帯	1,239世帯	271世帯

(2022/10/1現在)

西暦	できごと
1639年	オランダ船が父島・母島と思われる島を発見。
1670年	紀州のみかん船が母島に漂着。
1675年	江戸幕府が嶋谷市左衛門を派遣し調査を実施。
1830年	欧米人5名などが父島に入植。
1861年	江戸幕府は、小笠原の再調査・開拓のため、外国奉行 水野忠徳を隊長とする威臨丸を派遣。
1875年	明治政府は、小笠原の再開拓着手を決定し、「明治丸」を派遣。
1876年	日本による統治を各国に通知。国際的に日本の領土と認められる。
1880年	東京府の管轄となり、東京府小笠原出張所を設置。
1946年	SCAPIN-677により日本の施政権から分離。
1952年	対日平和条約の発効により米国施政下に。
1968年	6月26日、小笠原諸島が日本に返還。
2011年	小笠原諸島が、世界自然遺産として登録。

江戸幕府による探検調査

1675（延宝3）年、江戸幕府は、1670（寛文10）年に母島に漂着し自力で帰還した紀州船の乗組員の報告をもとに、長崎の嶋谷市左衛門を老船頭として、小笠原島に富国寿丸を派遣します。嶋谷市左衛門は、天文航法に精通していました。調査隊は島を見つけて、1か月余り島内を調査。「此島大日本之内也」という碑を設置したり、実測図を作りました。



「無人島之図」 所蔵:本光寺常盤資料館
写真提供:松尾晋一氏

欧米人による定住がはじまる

1830（天保元）年、無人島だった小笠原島に最初に定住したのは、欧米人5人を含むハワイからの移民でした。以後、欧米系の島民が継続的に居住します。捕鯨船が寄港する適地として父島が注目されました。

クリック 小笠原諸島の「欧米系島民」について



「奥州気仙郡三之丞蛮島漂流記」
1840年、父島に漂着した「中吉丸」乗組員が見た欧米系島民の様子。
所蔵:岩手県立図書館

幕末の再調査と開拓

小笠原島への各国の接近と牽制



嶋谷による小笠原島の調査は、ケンペルやシーボルトにより欧米に紹介される。これらの著作やペリーの『日本遠征記』により日本語の「無人島」という呼び名を元にしたBonin Islandsという名称が定着する。



米国

1853（嘉永6）年、ペリー提督は、日本に向かう途中、父島に寄港。アメリカ船の薪水補給所とするため土地を購入して石炭置き場を設置。その後香港に寄港した際に英国が行った照会に対し、同購入は私法上の行為であることを回答。さらに、1675年の日本の調査に言及し、1827年の英国の寄港より先行していることを指摘。「ペリー提督日本遠征記」では、太平洋横断航路の中継地点としての重要性を説く。



ペリー提督
出典：メトロポリタン美術館、オンラインコレクション
(The Met object ID 283184)



英国

1827年、英国「ブロッサム号」は小笠原島に寄港。ピーチー艦長は、父島にピール島、母島にペイリー島などと命名し、英国領を宣言。英国政府は正式に承認せず。



ピーチー艦長
©National Maritime Museum, Greenwich, London



ロシア

1853（嘉永6）年、ブチャーチン提督は、対日開港要求のためパルラダ号を旗艦とする艦隊で日本へ向かう。1853（嘉永6）年7月小笠原諸島を訪問し、翌月ここから長崎に直航。



ブチャーチン提督

江戸幕府による小笠原の再調査・開拓

上述のような小笠原島をめぐる国際情勢を背景に、英国公使オールコックは幕府にこの島が日本の所有か照会します。これを受け、1861（文久元）年12月、幕府は隊長を外国奉行水野忠徳、艦長を小野友五郎として、アメリカから戻った咸臨丸を小笠原島に派遣しました。水野らは、当時島に住んでいた欧米系島民に日本領土であること、島民を保護すること呼びかけ同意を得ることに成功しました。これを踏まえ、1862（文久2）年5月、駐日の各国代表に小笠原諸島の開拓再開を通告し、開拓者を派遣します。しかし、生麦事件の発生により、1863（文久3）年いったん退去します。



「12月19日初見小笠原島図」
宮本元道『小笠原島真景図』より
欧米諸国の開国要求に脅威を感じた江戸幕府は、ペリー来航後、オランダに軍艦を発注しました。咸臨丸はそのうちの一艦で、洋式スクリューを有する日本初の軍艦でした。安政7（1860）年、ワシントンでの日米修好通商条約批准書交換を終えて帰還した翌年、小笠原島への調査に向かいました。
所蔵：国立国会図書館



水野忠徳
所蔵：大儀寺



中濱万次郎
提供：万次郎直系5代目中濱京氏

水野たっの希望もあり、島島への漂着とアメリカでの生活経験をもつ中濱万次郎が通訳として同行しました。



左から「父島扇ヶ浦図」「母島沖村於て夷女舞躍之図」「母島南手之山上喫午飯図」

宮本元道『小笠原島真景図』より。小笠原島への航海と島の調査に、漢方医と蘭方医それぞれ1名の派遣が要請されました。漢方医としては本草学者の小野菴庵が、蘭方医としては、本藩は絵図記録係だが蘭医術の心得もあった宮本元道がそれぞれ選ばれ、医療に従事しながら島の産物調査を行いました。真景が得意と評された宮本が記録した絵図には、現地の住民との交流や、調査の合間の食事の様子なども描かれています。

所蔵：国立国会図書館

1876 (明治9) 年、日本の領有を各国に正式に通告。国際的に日本領土と認められる。

小笠原島の領有

1875 (明治8) 年11月、明治政府は、小笠原島の再開拓着手を決定。実情探査のため、「明治丸」で田辺太一、小花作之助らを派遣します。

同日、英国の軍艦も横浜を出発して小笠原島を目指しますが、高速の明治丸は、英国軍艦より 2日早く父島に到着しました。

島では、島民71名に開拓再開と日本国による再統治を宣言。島民は、日本政府の保護を受け、法令規則を遵守することを承諾します。



父島ノ内大村居住葡萄牙人ジョンブラボー居宅
所蔵: 国立公文書館 (公文附属の図・八四号小笠原島写真)



母島ノ内沖村海亀遣甲並豚囲
所蔵: 国立公文書館 (公文附属の図・八四号小笠原島写真)



父島ノ内二見港ニ明治丸並英国軍艦カルー号停泊ノ景
向かって左/明治丸、右/英国軍艦
所蔵: 国立公文書館 (公文附属の図・八四号小笠原島写真)

[クリック](#) 1876 (明治9) 年2月
小笠原島の写真
(国立公文書館Web)

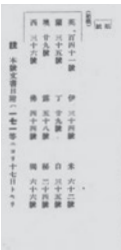
[クリック](#) 明治丸について

日本の領有を各国に宣言

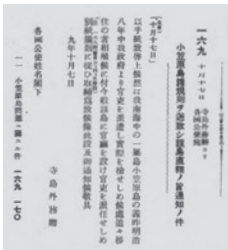
1876 (明治9) 年10月17日、外務省から諸外国※に対し、小笠原島諸規則を送り、日本が統治することと、官庁を設置して直轄することを宣言します。

小笠原島の領有についての異議は出されませんでした。英米は欧米系島民が母国の領事裁判権に服することを主張しました。欧米系島民は全員、1882 (明治15) 年までに日本に帰化し、領事裁判権の問題は消滅しました。

※送付先: イギリス、イタリア、アメリカ、オランダ、デンマーク、ベルギー、オーストリア、ロシア、ペルー、スペイン、フランス、ドイツ宛



外務省調査部『大日本外交文書9』1940年 (抜粋)
出典: 国立国会図書館デジタルコレクション



開拓小笠原島之碑

明治10年、島庁敷地内に建立。碑文を内務卿大久保利通が作り、日下部鳴鶴が文字を書きました。「小笠原貞頼による発見」以来の開拓の経緯について記載しています。
出典: ColBase(<https://colbase.nich.go.jp>)



1920年代から1940年代～返還まで

1920年代～1940年代

亜熱帯気候を活かした果樹や冬野菜の栽培が盛んになり、漁業ではカツオ、マグロ漁のほか、捕鯨やサンゴ漁などを中心に栄えます。

1940（昭和15）年、人口は、7,462人に達しました（父島4,302名、母島1,905名、硫黄島1,164名、その他の島91名。）



サンゴブームが起こりサンゴ成金が出現
提供：小笠原村教育委員会



父島清瀬のクジラ解体場での解体作業
提供：小笠原村教育委員会

戦時～アメリカ施政権下

1944（昭和19）年7月、数名の男性を除いた6,886名の島民が本州に強制的に疎開を命じられます。昭和20年の敗戦後は、米軍の占領下におかれました。

1946（昭和21）年、欧米系島民の家族だけは帰島を許されました。



米国施政下時代のラドフォード提督
初等学校での授業風景
提供：小笠原村教育委員会



米国施政下時代にあった社交場の建物
提供：小笠原村教育委員会

1968年、返還

日本に返還され旧島民の帰還と新島民の移住が始まります。



昭和43年6月26日、米海軍司令部前の
広場で開催された小笠原諸島返還式
提供：小笠原村教育委員会



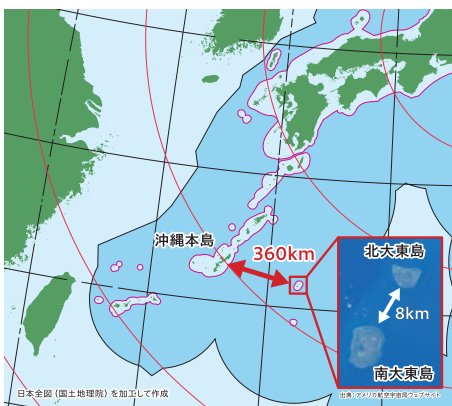
1968年6月、小笠原返還で父島から
引き上げる米兵
提供：小笠原村教育委員会

島々の歴史と現在

北大東島・南大東島

複雑な歴史を持つ砂糖の島

北大東島と南大東島は、欧米諸国のアジア進出の中、離島監視強化のため1885年に国標が建設され、沖縄県に編入されました。その後、1900年に玉置半右衛門関係者が開拓のために進出。砂糖の生産で栄えますが、町村制が施行されず、戦前、製糖会社の社有地だったなど複雑な歴史を有します。

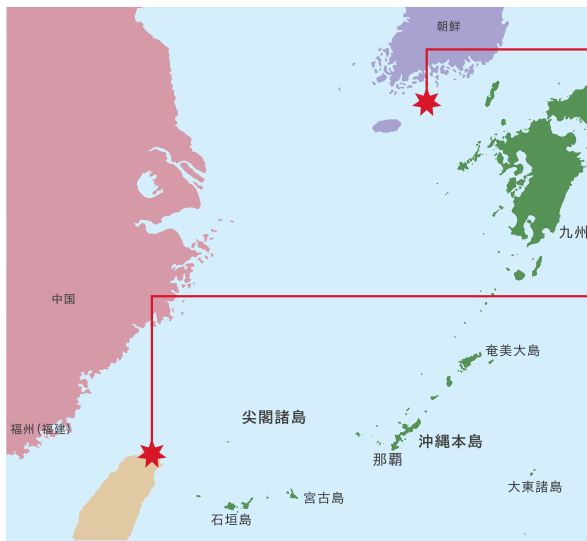


	面積	人口
北大東島	11.9km ²	561人(2022年1月現在)
南大東島	30.52km ²	1,230人(2022年1月現在)

西暦	できごと
前近代	琉球(沖縄)では「ウファガリ」(「東のはて」の意味)の名で知られる。
1820年	ロシアの帆船が付近を通過、「ボロジノ諸島」と名付ける。
1885年	沖縄県が調査。国標建設。沖縄県に編入。
1900年	玉置商会の関係者が南大東島入植。
1903年	玉置商会の関係者が北大東島入植。
戦前	サトウキビ栽培(砂糖製造)が両島の主要産業に。玉置商会→東洋製糖→大日本製糖が所有する社有島に。北大東島ではリン鉱石採掘もおこなわれる。
1946年	SCAPIN-677により日本の施政権から分離。米軍軍政下で、両島に村制が施行。南大東村、北大東村が成立。
1952年	対日平和条約の発効により米国施政下に。
1964年	大日本製糖との交渉の結果、各農家の土地所有権が確立。
1972年	沖縄返還により本土復帰。

1885年の国際情勢

1885年の両大東島への国標建設には、欧州各国のアジア進出、特にイギリスとロシアの対立の中で生じた巨文島事件が大きな影響を及ぼしています。



巨文島事件

1885(明治18)年4月、英露が対立し朝鮮南部の離島である巨文島を英国海軍が占領した事件。1887年2月に撤収した。

清仏戦争

1884年から1885年にかけて、ベトナムの宗主権を巡って清仏間で勃発した戦争。台湾でも戦闘が行われた。

両大東島への国標建設 — 日本政府、離島の管理強化 —

1885年、英国による巨文島占領に関し、日本政府は表立っての反対の表明は行わなかったものの、自国の周辺離島も欧州諸国により占領されないか懸念しました。1861年にロシア軍艦が対馬に半年間も居座ったことがあり、外国による周辺離島の占領は当時の政府にとって現実の恐怖だったのです。

このため、明治政府は、これら離島の監視強化に努め、その一環としていまだ政府の管理の及んでいない島嶼についても調査などを行うこととしました。その対象になったのが、両大東島と尖閣諸島でした。

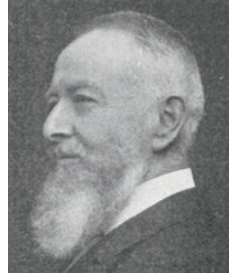
沖縄県は、中央政府の指示により、県の職員石沢兵吾を当時無人島だった両大東島に派遣、国標を建設し、中央政府に報告します。

1885年のできごと



井上馨外務卿
出典：国立国会図書館ウェブサイト

6～7月頃、井上外務卿は、駐日英公使に対し、離島の監視を強化し、いずれかの欧州諸国が日本の周辺離島の占拠を試みれば、防衛する意思を表明。



駐日英公使プランケット
出典：Sport und Salon, vol. 1900, issue 40

4～5月、先島諸島など離島の監視を指示。

6月、井上外務卿は、榎本公使に対し、英国による巨文島占領につき、清に英国への抗議を促すよう訓令、また、先島諸島に対する管理を強化する方針であることを説明。



西村捨三沖縄県知事
出典：国立国会図書館ウェブサイト

西村知事は、6月、森沖縄県大書記官を東京に派遣。8月1日、山縣有朋内務卿から「大東島取調書」による指示を受ける。

[クリック](#) 大東島取調書



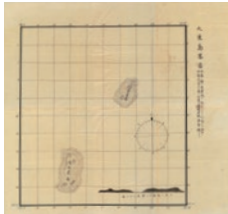
榎本武揚駐中国公使
出典：国立国会図書館ウェブサイト

西村知事は、8月末、沖縄県職員石沢兵吾らを出雲丸で両大東島に派遣、国標を建設。9月3日、西村知事は国標建設について中央政府に報告。

出雲丸を雇いあげ。5月、先島諸島を訪問し、西表島の炭鉱などを調査。



「大東島巡視済ノ儀ニ付上申」
『公文録』所収。1885年9月3日、西村沖縄県知事による両大東島の調査及び国標建設についての中央政府への報告。



[クリック](#) 「大東島巡視済ノ儀ニ付上申」
(国立公文書館Web)



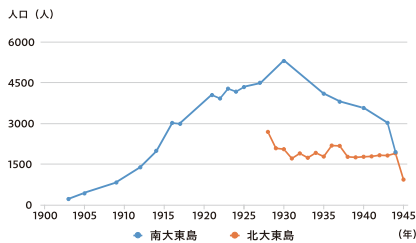
山縣有朋内務卿
出典：徳富猪一郎『公爵山縣有朋伝 中巻』山縣有朋公記念事業会(1933)

両大東島への入植と製糖業 ―会社の持ちたる島―

玉置商会による開拓

1890年代に入ると大東島に対する開拓への志願者が次々と現れます。しかし、資金不足や断崖絶壁により上陸できず失敗します。7番目の出願者であった玉置半右衛門は、沖縄県から30年間同島を借り受け、1900（明治33）年、依岡省三を長とし、八丈島民を中心とする開拓団を派遣、南大東島への上陸に成功します。

団長の依岡はサトウキビ栽培を行い、1902年には初の黒糖の生産に成功します。サトウキビ栽培は次第に軌道にのります。人口も急増し、大正初期に3000人を突破します。開墾地は30年経つと開墾者の所有になるという玉置氏との口約束が、開墾を促進した要因の一つであったといいます。



南北大東島の戦前の人口の推移

南大東村誌編集委員会編『南大東村誌』(1990) 及び北大東村誌編集委員会編『北大東村誌』(2017) 記載の統計を元に作成。



断崖絶壁に囲まれた南大東島
提供：(一社) 南大東村観光協会

会社時代

1916（大正5）年、両大東島の事業権は東洋製糖に引き渡され、また同島は翌年、政府から同社に払い下げられます。さらに、1927（昭和2）年、東洋製糖は大日本製糖と合併します。

開拓者たちは払い下げに反対し、東洋製糖と交渉の結果、開拓者の小作権はこれまでどおり継続されます。しかし、会社側は効率的な経営を追求し、開拓者による製糖を禁止、厳しい栽培管理が行われます。

また、この会社時代は、両島からの出入りは会社発行の証明書を必要とし、学校・病院・売店などは、会社がすべて運営していました。また、お金の代わりに島内だけで流通する金券（大東島紙幣）が発行されました。同島は、市町村制が施行されない「社有島」だったのです。

1946（昭和21）年、沖縄の米軍の軍政が開始され、両島に村制が施行されます（南大東村及び北大東村）。1964（昭和39）年、昭和26年からの交渉の結果、各農家の土地所有権が確立しました。

クリック 戦前の北・南大東島の社会構造

コラム 北大東島でのリン鉱石採掘

北大東島の開拓は1903（明治36）年に開始されます。1912（大正元）年に製糖が開始されます。

北大東島では肥料製造の材料となるリン鉱石の採掘も期待されましたが、肥料の原料としての使用は、アルミナを多く含む鉱石の性質上難しいとされていました。その後、解決策が見つかり、1919（大正8）年に採掘が開始され、1950（昭和25）年まで継続されました。



北大東島におけるリン鉱石の採掘風景
出典：『北大東村誌』



汽車によるサトウキビ輸送（大正末頃）
提供：(一社) 南大東村観光協会



南大東島製糖工場（昭和初期）
提供：(一社) 南大東村観光協会



成長良好のサトウキビ（昭和初期）
提供：(一社) 南大東村観光協会

島々の歴史と現在

硫黄島

硫黄の島の隆盛

小笠原諸島にある硫黄島は、北硫黄島・南硫黄島とともに火山列島を構成する島です。その名のとおり硫黄が採掘されたことが開拓・領有のきっかけのひとつとなりました。太平洋戦争では国内※初の陸上戦があったことでも有名です。

※ 戦前の「共通法」にいう「内地」を指します。



	面積	人口
硫黄島	23.73km ²	自衛隊の分遣隊が島内に常駐するほかは0人
北硫黄島	5.56km ²	0人 (2022年1月現在)
南硫黄島	3.54km ²	0人 (2022年1月現在)

西暦	できごと
1543年	スペイン船サン・ファン号により発見されたと言われている。
1779年	イギリスのジェームス・クックの艦隊が目撃し「sulfur (硫黄) island」と命名。
1889年	田中栄二郎が硫黄採掘と漁業を目的として父島から入植。開拓がはじまる。
1891年	勅令により東京府へ編入。
1940年	町村制が施行され「硫黄島村」となる (人口1,051人)。
1945年	硫黄島の戦いが発生。
1946年	SCAPIN-677により日本の施政権から分離。
1952年	対日平和条約の発効により米国施政下に。
1968年	施政権返還。小笠原村の一部となる。



摺鉢山方向から見た硫黄島俯瞰写真
提供:小笠原村

クリック 硫黄島のくらし

硫黄島の発見

硫黄島の発見は1543年にスペイン船「サン・ファン号」によりLos Volcanes (火山島) と名付けられたのが最古の記録と推定※1されています。

また1779年にはジェームス・クック船長のイギリス艦隊※2が火山列島を目撃しSulfur Island(硫黄島)と名付けました。

※1 この時の航海記録は不明瞭な点が指摘されています。

※2 クックは航海の途中 (ハワイ) で亡くなり、発見時指揮は部下が引き継いでいました。

ジェームス・クック (1728-1779)
の公式肖像画
海軍博物館 (ロンドン) 所蔵



硫黄島の歴史

日本の領土に

発見に関わらず、利用価値を見出せなかった諸外国からは硫黄島の領有権の主張や先占は行われませんでした。日本でも、1887（明治20）年に明治丸を派遣しますが「無用の島」として見なされました。

しかし、1889（明治22）年、主に硫黄の試掘を目的に田中栄二郎ら数名が父島から渡航し、初の入植者となります。

硫黄島の拝借願を受けた東京府は、その位置から「皇国ノ版図内」と認められるとして政府に領有権の確認を求めます。そして1891（明治24）年、勅令により硫黄島を含む火山列島が東京府に編入されました。

その後、この勅令はあくまで新たに領土を獲得したのではなく日本の領土であることの再確認・管轄明確化である旨の補足の閣議決定が行われています。



硫黄

クリック

「無主地先占」と日本領土であることの再確認について

クリック

硫黄島の東京府編入に対するスペイン世論



島の草野球チーム（1935年ごろ）

提供：全国硫黄島島民の会

硫黄島の繁栄

硫黄島で産出される高純度の硫黄は、軍事需要の増加もあり火薬などの原料として高く評価されました。

資源減少により採掘事業が10年ほどで一時停止すると、広い平地や土壌の利を活かしてサトウキビ・果物・コカ・レモングラスなどの栽培を中心に栄えます。

島には学校や飛行場が建設され、1940（昭和15）年には硫黄島村となり、人口1,051人を数えました。

戦地となった硫黄島

太平洋戦争末期の1944（昭和19）年、日本本土に戦線が近づくなか、飛行場があり重要拠点であった硫黄島村の住人たちは本土への疎開を余儀なくされました。

その翌年ついに米軍が上陸します。米軍は当初5日間で島を攻略する計画であったところ、硫黄島守備隊最高指揮官であった栗林忠道中将（当時）は最終的に1ヶ月以上も洞くつ陣地で戦闘を展開。双方に多大な被害が出る、太平洋戦争最大の激戦地の一つとなりました。



栗林忠道(1891-1945)



硫黄島訪島事業

提供：小笠原村

現在の硫黄島

疎開から約80年の現在、元島民の帰島はできません。

そこで、東京都および小笠原村等では墓参・遺骨収集・平和教育などのため、定期的に硫黄島訪島事業を実施しています。

クリック

第22回日米硫黄島戦没者合同慰霊追悼顕彰式（外務省Web）